

# 1/2で割る

京都教育大学教授

森山卓郎 もりやまたくろう

スタジオジブリの作品に『おもひでぼろぼろ』というアニメ映画がある。タエ子という首都圏住まいの若い女性が、田舎で小学校時代の自分を思い出しつつ夏の休暇を過ごす。その中で、小学校の算数で「分数で割る」ことがわからなかった、といったことを思い出して話す場面がある。

たしかに、分数というのがそもそも「割った」数なんだから、分数で割るなんていうと頭がこんがらがってくる。二分の一で割ったら倍になると「かける」でわかっていく。考えてみると「かける」だってわかったようにわかりにくい。そこで、「かける」「わる」という「言葉」から、算数を考えてみよう。まず、「かける」だが、例えば、トネルを掘る仕事で、「一日がんばっ

て掘ると二メートル進む。同じように三日かけて掘ったらどれだけできるか」のように考えると「トバと計算がつながる。「二メートル分の仕事に三日かける」のイメージだと「2×3」という計算がわかりやすくなる。

では、「わる」はどうだろう。これも「割る」のイメージを使うとわかりやすい。皿やガラスはだめだが、区切りの入った板チョコを「割る」イメージだ。例えば、十個に区切られた板チョコを一人二個ずつになるよう、割るわけだ。「十個分の板チョコ」を二個ずつになるように割ると何人分になるかが「十個割る二個」で、めでたく五人が分け前にあずかれるという計算になる。「割る二分の一」もこのパターンならわかりやすい。「二分の一、つまり、

半分で割る」ということは、「一人半分個ずつになるように分ける」ということ。すなわち、皆「半分でいいよ」となるわけだから、もろえる人の数は倍になる。どうや、タエちゃん。

どんな数でもゼロでは割れないということも、「0個ずつ」ならそもそも分けることが成立しない、ということだ。イメージできそうだが、ただ、「要らないならおれがもらう」とか「次にとっておこう」などとけちくさいことを考えると、ちよつとこんがらがってくるのだが。「言語活動の充実」ということが言われている。どんな教科でも、考え方や感じ方を話し合ったり、言葉で理解を深めたりすることは大切だ。国語はその意味で基盤の教科だ。子どものタエちゃん、国語もがんばってね。